







Vertical red seal impression on the right page.

く海ふさ 河海ふ門のまを  
も曲のまをひかり

たぎこめて

これとめま乃ゆ湯もそぬよ

まらーまらーまらうひにたり

それ河うさ きれお序也

花いさるりお月いらんふき紙

のこんろ物久ぬよむらひて月

とさひ。それとめま乃ゆ湯と

ぬもふ紙あられま情あり。さ紙

ぬへきかみのこまを持ちりきやれう庭まこころんふお

くれ。きれもれとんくおの。まらまらわらうらふ。

やく敷ちりもよくれんもむ。さうらりありて。ほうて

あももの。かろふ。むさだてとりろふおとすうらふと



久むれらり月のごまぐさよあはれ  
 かくれまう人 禰の字也  
 よろつのみも 月夜かこ  
 あふよよ月夜をきて下  
 又男女のこもといんとしてか  
 うきつ詞つぎき  
 ねりけれ おもころをれと  
 云心也  
 男女のみさげも 是より  
 好むよいめと云海を相  
 逢はつのもいれあさげぬ  
 うきと也  
 雲井城  
 月乃めくりあまき  
 月乃めくりあまき

久むれらり月のごまぐさよあはれ  
 かくれまう人  
 よろつのみも 月夜かこ  
 あふよよ月夜をきて下  
 又男女のこもといんとしてか  
 うきつ詞つぎき  
 ねりけれ おもころをれと  
 云心也  
 男女のみさげも 是より  
 好むよいめと云海を相  
 逢はつのもいれあさげぬ  
 うきと也  
 雲井城  
 月乃めくりあまき  
 月乃めくりあまき

望月十五夜の月を  
 謝希逸月賦美人邁兮音塵  
 隔千里兮共明月 馬季  
 嶠百詠三五 八夜千里与  
 君同 白氏文集三五夜中  
 新月色二十千里外故人心  
 曉ちくありて 古今序は  
 女の月を思ふよあつさま  
 雲よあふりこも

望月十五夜の月を  
 謝希逸月賦美人邁兮音塵  
 隔千里兮共明月 馬季  
 嶠百詠三五 八夜千里与  
 君同 白氏文集三五夜中  
 新月色二十千里外故人心  
 曉ちくありて 古今序は  
 女の月を思ふよあつさま  
 雲よあふりこも

望月十五

望月十五



推し来ちかかみのぬきさふさふさう。おれはよ

きうめきたうら。男あして心あんな友もかど。お

こへて月花ハハ。莊子駢拇。篇吾既謂明者非謂其見彼也自見而已矣。一

遵生八牋五云水樂洞雨後。聽泉我輩豈無耳哉更當不以耳聽以心聽。

春八家と立さうて。山谷詩。春去不窺園黃鸝頗三請。今夜鄜州月園中唯獨看。

ハむとよとさうら。ら。ん。の。も。の。ん。す。奥とさふら。ん。を

ねやれらあうもさへう。いとたれもさう。お。せ。れ。人

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ

あうめもせひまもりて。酒の連さうて。さへハおんき

あう枝あくおりさうね家よ。あはさう。さうて。さふハれ







みとおもひよす世に。牛飼下部あふのどくねる

きくくくく 美藤の巻

せ

と。はらくよゆふ。見るもの世くあふはくうを

よんだくあふつる車とも。あふくあふくあつる人も。

いつくかひつらん。はあふあふありて。車との

らうりきき ぐれりき

也源氏タカがよらうかり

き大治 くにとくまき

とあり

すれくも 枝あふる

具あり

色あり。おうくもきくく

らうりききもすもねせん。麓

くもさうりくひめれまふ

きくもきよありゆくく。世れ

世のこめ 糸の始終を

て世間治乱盛衰のすを

とひいてまあり

大治元 見物群集の

人のまを終りの死ねへくれハ

我もま教よんんと也

あつら 源流類聚云巨と等

とひま也

あつらあつらありぬ。世れ人教もこのハあつらありぬ

く。び人みあうせあんは。我が死ねくもまのいぬ

大あり聖よ水とハ。漏刻の巻

皆あつらつらつらつら

後漢書王符清山林不能給

野火江海不能實漏刻

へ。おがきまうらうらこの水

くともも。かあくまらうらきぬ

誰か人乃ん。せうり。あつた

いあれ。の機あれあつら

大治元 ちちちちちちちちちち

ため。もぢひとくれて。糸糸

わかれ



















友道の橋 肉裏よ友道の橋  
心通れ橋あり

ことやう 異風折也

あらたく 舟外ありとくじ  
きんせ也

おちけり 後の字あり口  
きんせ也

あゝさや 児のよかへの三ありて  
ともあかきもぬちきんせ也

暁梅と虫 王荊公  
詩中櫻拖石映松枝比並餘

花流寂煙 只有春風獵獵莫  
吹香渡下 報人 知は活と中

兼は山梅と影せり 全吉  
諸君は梅批の部より入り

東坡詩 二月驚梅  
梅

金巻三

しむしのつきとむじと

梅はあろきさう千ね梅ひとか

るりく 咲らるもくさありら

紅梅けむいめくさ記もく風折

しきき梅は梅は記あひて

おがえとよりきさされてさ

よ志かこつきさうむじひえ

あうりせんさ記してらりらうさ

幽書此地無

系極入道 凡雅集十五定

家やえやうすききんせ也  
あゝさやいんせ也

たりかのさうさうては  
あ梅乃未れえさ梅ひつ

きんせ也

永福門院内付

こすきあ宿の音よはさう  
うらうぬ影さあゆ梅くえ

返一 前大御公為世  
くら梅さうき影え乃梅くえ

あゝさやいんせ也  
介月さうりれさうえ

社牧詩 霜葉紅於二月花  
さひ或一 報縁勝花さう云

とくわうとく。系極入道中

納えいあといと人梅とまん

らうらられらりきさ。系極の

屋れ菊びきさふんも二

侍らめり。柳又たう。卯月さう

け目らかえう。さうてよろつれ

ねさうもまさうりてめくさ

梅あり。ばら花かつ。いつさ

天建卷三



とある

池の蓮 謝灵運庐山入  
て東林の池をかり蓮より  
へり蓮は葉も花もそのお  
ちたれともくもくもくも  
さ八国を収めり  
めくくは物あり 愛もくま  
物也と云々也  
きらくく 桔梗也古今池の  
名のきよ  
秋らくく時ハ成よくり白き  
とくるもくもくもくもく  
るもく 紫花也やとびと通  
す  
つととと ちんちんちんちん  
洗あり 袂衣

毎巻三

十

木を物あり人ありゆ。まの  
山吹菘かたつてあてし。  
池の蓮。秋乃まよる萩落  
きらくく 萩女郎花。少らく  
海志よ。よしもかろくも。  
アんだくきく。菖蒲もはし  
くも。胡ふ。くしほもくも  
くらす。さやうあつ地よ。ま

心まの。まの。まの。まの。  
秋もくもくもくもくもく  
アんく 龍膽也 古今よ  
我やまのまの。くくもくも  
のらまの。くくもくもく  
黄菊 月令は菊を花とわ  
池ハ菊花をまの。と云々  
三寸  
さくやう 河海は樹。許サ  
かくもくもくもく 丹桂は木  
とまの。樹く。秋農もま  
ぬりハ。まの。まの。まの。  
あんとがくもくもくもく  
まの。まの。まの。

くぬの。いかりの世もま  
あつ物。かめれくもくも  
く。まも。んま。れぬま。く。い  
あつ。く。か。す。お。か。く。ま  
ま。め。く。く。あ。り。か。く。物  
は。よ。う。く。ぬ。人。乃。ま。く。く。真。ま  
あ。物。あ。り。ま。ま。く。く。物。ま。の。ま  
て。あ。り。あ。ん

夫道三



賊跡多し 山谷詩遺金蒲瀛常

作史 伏波將軍の賊と親族故旧

にまへ施して世の人れあつてさう

の守後の奴あつてさう

死して賊跡しる。智忠乃

せさる処也。よろぬ物たかく

へ置たりも拙くよれ物いふとめまんとはよりあ。

ころくおがふるまへてはれ。我うえめあや

いふものありてはれおあひらうとあわ。極ハ

後よと心さす物ゆら。いさくんうらあうゆつる

へき。おあひらうとあわ。いさくんうらあうゆつる

何色のころくおあひらうとあわ。いさくんうらあうゆつる

悲田院 拾芥中末云在鶴川

西畔施藥院別所也養殖子

病也

けうまに 無双 無左右

あふものまき也

吾妻入 異かよあつてはれ

けとありゆうさハ猛者也

目ハ氏尊東社の時極難海

よりのて死寸尊ゆりよりゆ

返うて東をかくりと極難の

りよとひ出—吾孺やとの

たまひ—よりゆとあつて

とつ小日記よるえ俗世と

も須うあまのハ文選とて

意最とあつてよむとあれ

くあき いかし—からあ

ひえんわん けうまに

悲田院乃其蓮上人ハ俗姓ハ

三浦也あふりともあ。けうまに

武者あり。故のハ人れあうて

物後ととも。あつてはれ人うい

つらとれたのまるれおれ人

しとらき乃こよくて。実あ—

とつひ—と。聖それハこつ我

おがすうたとも。よの世ハ都江



やまねーちうーの園あて指  
てふ也

御徳のいふこと 御徳の御徳也

是より其徳の言詞也

きやまきーちのまきーま

也

ちうーくくくくくくくくくく

あまの人の心をよむるにや

侍りておやううお侍

ありまよくの心をよむるにや

しうりしんをよむるにや

しうりしんをよむるにや

しうりしんをよむるにや

しうりしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや

くふしんをよむるにや



よき一言

論語不以久廢

句ありと見ゆるを其もよれ一言

詩  
其夷の心をき 田舎人也

いふ色の也。あつ物うをいひと云

れそろーもろろろ。かへよあひて。水子ハおしすやと  
とひふ。せむりもそち侍。はとこへーくハ。さへハ  
物のあはれハ志り。流り。情なきは。かみろこも乃ー  
あはんといと。おそろろ。子ゆへは。こよろろ。れあはれ  
冬。あひさるあれと。いふ。さもありぬま  
事也。思毫の遠あ。こハ。い。あそのく。か小慈あひ

ありあんや。孝忠の心を。孝を。みりらて。こお

乃志を。ねと。い。さるあはれ。世を。す。こ。人。れ。よ。ろ

よ。す。り。は。も。あ。ろ。ろ。あ。へ。て。か。こ。お。か。ろ。ろ。人。の。よ。は。ろ

下 白氏文集偶吟詩

おるつ。い。里。あ。つ。き。を。か。え。

亦無憂。匹如身。後。有。何。度。應。向。人。同。無。取。静。念。道。經。深。

困。目。閑。迎。禪。客。小。低。頭。猶。殘。少。許。雲。泉。興。一。歲。童。門。教。度。

遊 沙石集第四詩を引

ま。も。ろ。ろ。あ。か。ろ。ん。お。や。乃

す。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。人。の。一。抱。も。あ。よ。も。ろ。ろ。ろ。良。也。下。郎。ハ。す。ろ。ろ。と。ろ。り。

こ。あ。妻。子。れ。こ。あ。あ。は。恥。も



かゝり 妻子也上卷よりえ

たり

ぬすみもあつて

後漢書云祐頌帝時遷膠東侯相祐政惟仁簡以身卒物吏民懷而不欺畜妻孫性私賦民錢市衣以進其父得而怒曰有君如此何忍欺之促婦伏罪性慙請闕持衣自首祐屏左右問其故性恨述父言祐曰祿以親故受汚辱之名取謂觀過斯知仁矣使婦謝父還以衣遺之

人恒の産なき頃々 孟子梁

惠王上篇曰無恒産而有恒心者惟士為能若民則無恒

産固無恒心為無恒心放肆邪後無不為已及陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有行人在位罔民而可為也是故明君制民之産必使仰足以食父母俯足以畜妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後驅而之善故民之從之也輕云黎民不饑不寒然而不至者未之有也

人きまよりぬすみは家語云歎窮則擢鳥窮則喙人窮則詐 海濱は小人窮

凍餒 孟子盡心篇取謂西伯

もけ

のころとあつてとけられた  
ゆへうす。人をころすは法  
とをころす。そむくは  
まらん事不便の事也。さて  
いへて人をめくむは  
あつて。このころつてや  
西をやめ。民とあて農とす  
めん下は利あらんよりうへ







府生殿 職原下云左右近衛

府生、木將判授之、大納言

大將、不召仕、府生、大將以上

召加、府生也、又左右衛門左

右兵衛、もみふ府生あり

阿字本不生 大毘盧舎那經

有情及非情阿字第十命

又云我覺本不生

新羅國靈妙寺、僧不可思議

釋曰秘密中、秘釋者阿字自

誦本不生

て。あふたうや、宿執、軍、後、れ

人うか。阿字くともあつそや。

いふあう人の内馬う。あまりよ

たうとくおかゆういともあひ

流々れ。府生殿の内馬ふひ

と善なり。あはめて、記、とり

か。阿字本不生よらうあまれうきう記結縁と

とあつらうれとて感涙とこのれきつとそ

三十八

三十九

四十

雨、乃、秦の重躬。水面下野入道、信、和、と。

落馬の相あう人あり。終つて、とあへといひ

きうと。いとまよとて、か、は、あ、ひ、う、う、よ。信、和、と。

よりおらして死よらり。道よ長一ぬら一云、祓

の、と、と、人、あ、り、さ、え、い、う、あ、う、相、う、と、人、の

とひ、な、れ、ハ、き、い、め、て、桃、ち、り、あ、て、沛、艾、此、馬、を

沛艾 文選藉田賦、龍驥騰、

而沛艾注馬行兒

以相とあせせり

よやまてらうとあせせり

このうか、い、げ、相、と、あ、せ、せ、り

つ、ま、い、い、う、ハ、ア、あ、や、ま、り、た



いつらハアやまうらう  
何の事といつてさる也

明雲 久我太政大臣雅實公  
孫顯通卿子也山内座全也  
崇徳天皇御時  
崇徳二年天合座主明雲僧  
正と法住寺の依吏招法一  
延へり十一月十九日木曾義  
仲兵と卒して法住寺殿を  
責やうの傍にふるまふて  
道人と志多ひを木曾り  
大將楢六郎叔忠の放矢は  
依腰の骨を射ちて真逆は  
後多ひもあがり法ハさり  
けつと親忠の郎系落さる

家とらうひまう  
明雲座主お老いあひ流る  
そのせも一六伏の鞆やあ  
系とたつひ流きれお人まこ  
とにまおひますかやいり  
あうおうとるめくれ傷害  
乃おうせたります海き  
方あてかやももかくおが

也頭と云盛衰記三十日  
えり

ふそあやうせきさ  
て矣ふ何うりてうせ流より

格式 嵯峨天皇乃时弘仁格  
弘仁式を撰と清和天皇の  
时貞観格貞観式を撰す醍  
醐天皇の時延喜格延喜式  
と撰と是を三代格式と申  
也律と令とふ令て明法家  
と性士と云り

四十年の人の明堂灸經曰男  
子三十以上不可不灸三里

あうあまうあまうあまう  
能みおきくれありといふとら  
く人のいひ出せろあり格式  
等もそ忍えすと持

四十年の人の明堂灸經曰男  
子三十以上不可不灸三里



三重、所以下氣也

鈔本卷三

十一

て。三重とやうなれは上と氣は

あり。必きうすへ

廉茸を鼻小あててかくへ

は。ちのさ泥虫ありて鼻より入

て腦をむむといふ也

廉茸 廉のやうな角之 本草  
曰不可以鼻嗅有小白虫視  
之不見入人鼻必為蟲類藥  
不及也 瑣碎録云廉茸麝  
香肉苁蓉切不可就鼻聞蓋  
有微蟲

細とつらんとする人よくせさへん程はあま  
ふ人よきわねうちうのあひえてさ  
らんらんかめがけひよめれ

かくみん一藝もあひうりしとあり

堅固く不まうり 一向初  
心の時よりとらふ  
つぎあひまき 強面強顔  
おまてつらう 蒸練すまき  
と云發也

堅固かこがまうりあり。よま  
中おまてして。そらわ  
らうめも加はつてあひえ

天性その骨 生じつきの器  
用也  
あひます 泥まうますはこ  
わねこ

てたあひん天性うれ骨  
おきれもあひあつますみ

あり  
とらまき 漆の長まうり  
不堪 かかりぬ候之器用ふ  
ふと云

うりおせして。あひえ  
せえ。蒸練のくあひら

鈔本卷三

十一



派蒞 二名もよみかたきまき

恥辱をたがふ事と云也

乃のどきとてたゞ一法を  
とまらざる

故得せされん みるのよき

亦善也

世のらくせ 情士も身世はもの  
ありと云あり

善珠法師ハ光明皇后ハ華

子也沙門とて唯戒をま

へしむらうありゆへはち

く恥辱とていふことあり

こつとあて各月のありきり

くうたれて凡のこもたれ

賢賢もぬきあまてや

はさりきれん度く云を

ありつづるよよまれば位は

くも海にきんよゆりされ

て双のきりもさうりも也。天下

の物れよまらへとも。娘ハ不徳

乃波えもあり。吾下れ派蒞も

ありき。されともそ人みられ

ときてしし。まじあはしく

て放得せされハ世れをせり

あうせり

年をすまて 論語子罕篇

後坐可畏焉。知來者之不知

今也四十五十。而無聞焉斯

亦不足畏也。巳 大戴禮修

身篇曾子曰年三十四十之

間而無藝則無藝矣五十而

不以善聞則不聞矣七十而

未壞雖有後過亦可以免矣

ゆりしくあえんこと 藝の

本しくもよあうこと

おつらうすすて 不審

さるの極あり也

てあ人の師とあつる。徳は

かろくあり

或人乃いそく。ま又十おさる

まてよよい。まじあはしく

とよあつしき也。まじあはしく

きり来ともあり。老人のよを

人もえし。つらうす。徳のまあり

さるの極あり也



かりいよろつもの志いひやめて眺ありようめや  
 ともあつかりきれば世俗のよもめたつさうりて  
まがら生涯とくすは下魚の人也ゆりくおひえ  
 せしとままあひきくとももをあま詠をさうりお  
 へお平つうあうすしてやむへ。もいより  
 のうむとあうてやまんハ中一のうまも

西大寺 大和國よりあり七太  
 寺のうら也

冷井云高野天皇天平勝寶  
 元年創之至天平神護元年

西大寺静然上人腰くあり  
まも肩志ろく。後よこたきころ

十七年造畢詳續日本記

西園寺の内大凡 実衛公也

左府公衛公の男又竹林院  
 と号す

資朝卿 權中納言從三位  
 兼建使別當後醍醐天皇時

人也日野俊光卿三男  
 むさしわひて 莊子ノ競の  
 字とまゝあつとあり

有と海めて肉裏へまの競  
 ころまのど。西園寺内大凡殿。  
 あかたうとれきしきもやまも  
まがら信仰のきこくありきれば  
まがら賢翁にこれとて。年のよ  
 かりいよろつとやされたり。後

目ふむく人の流すくむさしわひて。毛をけ  
 ころをむりせて。げ氣をたうとく思えくゆ中



て内府へまゝにせられりきりしと我

為兼大納言 毘沙門堂と號

定家 為家 為教 為兼

為兼大納言入のめしとされ

推大納言正二位藤原長元依勅撰進少葉集正和元年兼覽之同二年十月十七日勅發同四年十二月廿八日東使とて出され侍後へ流罪すす公卿神任より入るなり 或説は為兼佐淡路へ流罪すし公卿三首とよみ阿蘇陀仏といふまゝと笠掛すなりといふまゝなりとて教發して嘉元二年歸洛と云ふ

風雅集より兼東へまゝなり

あまの川と流りきりしとありやと川といふなりあまの川とあり

六波羅 北条家西人の一族と系初よりきり兼西國の公と有りむと云ふ六波羅

て武士ともうらかこみて六波羅へおて移され六波羅御一系よりまゝとてとてあまの川に世にあらん思出かくし

号す東鑑より詳あり

あまの川と流りきりしとあり

い人 賢明也此に三波皆賢明なりとありなりい人といふあり志氣ありと人ありとあり 益山あり

い人東寺門よりあやとりせられりきりしとていふは

のあつまりおろろも是もねらゆらちんあつていつくも不きいとやうありとありとありふたはひまはくせとれ世をきとありとありとありひてまゝなりおきりかといふやうにせれ奥つまそんよりいふせくおがえされきりすか



かおめつ〜かぬ拘まはさくまをひいて、海まりて  
 後このるう人本まこのまま。こまやうまは曲折まある  
まりまとまて。月まはまりまこそま〜めつまは皮まかまの拘  
 成まをますまりまありまのまりまとま。奥まあまくおまりまえまれた  
 弾まふまへまられませまるま本まこま。こまれまやまうまとま〜ま  
 へま〜りま。さまもまありまぬまへまきま事ま也

機嫌と云々ハ仏書まよま出まり  
 耳まよまさまりま 漢書張良傳  
 忠言ま難ま於ま耳

世まよまとまこまうまんま人まハ先ま機嫌まを  
 志まへま〜づまのまてまあまきま〜ハ

人の耳まよまもま〜ろまひまかまもまたまりまひまてま。そま〜りまあま〜  
 ことま〜やまうまのまありま〜とまいまほまへまきまありま。但ま病まとまうまをま。  
 子ま〜とま死まぬま事まれまとま機嫌まとま〜りまにまつま〜あま〜  
 生ま位ま美ま滅ま 藏ま果ま法ま教ま曰ま。四ま相ま  
 小ま廉ま何まありま生ま老ま病ま死まハま廉ま  
 のま相ま也ま生ま位ま美ま滅まをま細まの  
 四ま相まありま生まハま生まれまゆまりま委ま  
 位ま々ま人ま間まはま居ま位ま〜てま對ま峙ま  
 とまありま吳まハま病まとま〜きまてま吳ま  
 形まはまありま滅まハま死ま去ま也ま  
 けまきま河まのま 論語ま子ま罕ま篇ま子  
 在ま川ま上ま逝ま者ま如ま斯ま夫ま不ま舍ま晝ま晝ま  
 夜ま程ま子ま曰ま此ま菟ま體ま也ま天ま運ま  
 ありま〜とま。志ま〜りまもま〜とま不  
 らますま〜とまらまよまあま〜とまあまひまゆま〜と



而不已。日往則月來。寒往則  
暑來。冰流而不息。物生而不  
窮。皆与道為体。運卒晝夜未  
嘗已也。

真俗 真出世間俗世間也

美くれては 六韜云春道生

万物榮茂道長万物成秋道

缺万物盈冬道藏万物靜盈

則藏則後起莫知平終莫

知匿始

秋名かよひ

下々水子秋すかよひ

むと小象のよまへす

小春 初学記冬日其暖如春

故謂之小春夏文類聚前集

十月の初よまへす

武部卷三

三十三

の也。されば美俗よつきて必  
くはとせんとおひんことハ機嫌  
とふへくはとくはとふへく  
く是とあともむおききあり。  
美くれては後よあり。後にて  
く秋れらるよあはれ美いやり  
て後のききとよわ。後より  
すはよ秋かよひ秋ハ初冬

あり。十月ハ小春ハ天氣ももあくあり。梅もつ不  
とぬ。本義のおつとも先おらてめくむよハあはれ。  
下よりききつとらふとてあつたりなり。  
ひより氣下よあおせくは故よ。まあらとらけ  
いて甚とや。生む病死のうりききつとらふ  
四季ハあはれ 四季次第あり  
ゆへハ四季と美也。梅序と云  
と也也  
さしまれおついであり。死  
死をいついてとゆへ死ハあはれもききと

武部卷三

三十四



らぬ。かひくくろふよせむきり。人皆死ある  
しとせむりて。まづこと志うもきうあつら  
ふ。おがえむして来る。神かみのむくころうまれ  
とも。破やぶりり志かのもろろあも

大臣乃大饗 大臣乃官も仕  
せしあつ時の饗應也

大臣乃大饗たいきやうはさうへきあを

宇治乃大臣殿 宇治の藤原  
府頼長保元の乱よりこれ  
たまひぬせいは院園自忠  
実公の二男法性寺園自忠  
通公也

宇治乃大臣殿ハ東三條殿  
めくおこあつら肉裏もて

東三條殿 拾芥中未云四條

めくおこあつら肉裏もて

院誕生辰或重明親王家云  
云二條南町西南北二町忠  
仁公家貞信公大入道殿傳  
領長久四年四月晦日焼失

ありきる城やしろにされけり  
ありて。代かきあへ新幸あり

きり。させふことよせあきせしもの。女院の  
あまとかりや。故実こまじあつらとせ

筆城ひでとせハ拙せつりれ。樂器がくきとせれと巻まをたん  
とあふ。盃城さかとせれ酒とおもひ。さの城とせハ拙せつ  
撫なううんんとせあふ。大鏡師  
輔公の傳たすけもあつらとせたまふ  
とあり双六ふたむすのあつらとせ  
又えとせ



不義の戯と 詩云善戲謔号

不為虐也

聖教 經海等と云

あつらひ後 暫乃字也 自地

と云也

本論語注 卒尔 輕遽之見

不義れたまふ事なすか

す。あつらひ後ハ聖教の一事

と云すハ何と云く前後此文

も入り也卒尔云て後卒此也とあつらひむ事

もあり。かりに今此文をむらむと云ふ事

多むと云ふんや。是別あつらひむ事なり。ん

おろしむとも。仏あつらひむ事と云ふ事

らん。あつらひむ事と云ふ事。あつらひむ事

繩床 梵網經に菩薩十八物

のうちの也 李白草書歌行

宣州石硯墨池先吾師の羽獲

倚繩床 謂懷素

唯と云ふ事 妙と云ふ事

理と云ふ事 事と云ふ事

事と理とを各別あつて一偏

に著と云ふ事 既隊事際と

りてきりて事理不二と云

つら合家の偏也か相不背

内法必熟と云ふも惠心の僧

都此常後也

の公あつらむ。繩床よ唯せと。お

わえすすて 稔定あつらむ。

事理と云ふ事 二ありす。外相

もつらむ。内法必熟す。

と云ふ不信と云ふ事。あつ

らむ。これをばつらむ。

あつらむ。その成と云ふ事。あつらむ。その成と云ふ事。

たつらむ。その成と云ふ事。あつらむ。その成と云ふ事。







禁決りて麻糸切大迦業

多入といへり

法閑寺 東山云う言の辺也

よあり捨芥下本云清閑寺

佐伯公行建立

金巻三

三十七

くくといふもさうし候はる

獲麻子さうみといふあり

法と法の字をすまへり

日ろ一。濁アそいふと清字の僧正候れき。

つよふふもふかかふとのと候か

疑乃さうりハをまより百

又十日とも。時正のは七日後

もいへと。並書より七十五日。

附正 彼岸の中日と附正

紫やうらうら

遍照寺 捨林云廣澤僧正造

池 廣沢僧正ハ寛朝也

寺後城にあり

遍照寺に兼仕法師。池の考

を日さうらうらひつきて堂

うらまてえをゆきて。戸をらうあきされハ教

をさうらうらひつきて。後をの述もいつて

たぐこめてさうらうらひつきて。さうらうらひつきて

とさうらうらひつきて。さうらうらひつきて

て。んようきくた。むのののことも。おこす

法巻三

三十八







かくはさしあ。きさかふあ時。さうひれらう。  
そ蓋のひりさりとらふこも成るるに

あつら乃人れ却の人よまうりり。まこれ人志

あぶら 吾妻よゆきてあさそ。又中寺中あそえまれ

ねう取密の傳。さうて家俗はあさそ。人う

我俗 我風俗也一本は属のま  
まうり我族教さうり

雪仏 貞和集云元雪佛頌一  
か入るれいともあへるじと

華摩出一如來六出園の呪一  
えあよまの白り香佛を化

官裏不投胎 子元佛光國一  
師祖元也又雪寔磨雪布袋

とあつも雪よても像とつ  
うり也 又張文潛戯作雪獅

絶句六出粧成百獸王日頭  
出後便即當擔肩挂眼人誰

怕想汝應無熱肺腸  
獅子を仰りつるとええた

安室 二字とよみとよ  
むえ仏をすんといふ

いもくさうらよいよまうりも甚あ

あぬられ 我なまあ  
いほいさうらう人あぬら

つて。そまため小金銀珠を

のりさうといとあまも堂候を

そそんとすうふ似らう。そ

う梅へとまらして。あ安室

えんや人の命ありとえんが

とまかよりきゆりともあ















にありては。かきりまかりし  
我も忘因しき友のまろ  
田よりくりまきむむま

はかしくおり人のつれく  
よていれ志し。きふハ公諱

おあゆいんハこれ

かきりよハあしきふるし。

阮籍の青き服 竹林七賢  
の内あり

阮籍の青き服 竹林七賢

晋書阮籍字嗣宗不拘礼教  
能為青白眼對之及嵇喜來

きしも也。まきしこあはよ人の

弟康聞之乃齎酒挾琴造焉

まのの。のうに抱膝してぬ

籍大悅乃見青眼由是法礼  
之士疾之若讎籍時坐意獨

おぬいとも。又文もく

駕不由徑路車迹所窮輒慟  
哭而反

く安えまむひあをたこのる

いひやいかにいひい

貞とおゆ人の。我まへあつとハまきこて。よそま

しこて。人の體はうきむさのトまてめとくそ

はよ。ああつとハ人よおかりれぬ。うくおゆ人のハよそ

まてまらあくとろといええすして。ちうきこんくりお

かやうとれと。おひくおほめあり。碁盤乃は

棋盤の角よりとて

後漢書梁冀傳冀能挽滿彈  
碁法挽滿猶引強也藝純曰  
彈碁兩人對局白黑碁各六

鉄板卷三

三十二







痛之ヲ<sup>シ</sup>神靈<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup> 於神靈<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup> 風卧<sup>シ</sup>温<sup>シ</sup>反<sup>テ</sup>責<sup>ム</sup>仲人<sup>ヲ</sup>失<sup>レ</sup>覆<sup>シ</sup>皆<sup>シ</sup>疑<sup>ム</sup>人也<sup>ナリ</sup>夫慎<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>謂<sup>フ</sup>舉<sup>ル</sup>動<sup>ス</sup>之事<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>皆<sup>シ</sup>慎<sup>ム</sup>思<sup>フ</sup>

その化 徳化也

禹<sup>ノ</sup>れ<sup>ノ</sup>き<sup>ク</sup> 書大禹<sup>ノ</sup>謨<sup>ニ</sup>帝<sup>曰</sup> 密<sup>ニ</sup>禹<sup>ノ</sup>惟<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>苗<sup>ノ</sup>弗<sup>レ</sup>率<sup>テ</sup>彼<sup>ノ</sup>祖<sup>ヲ</sup>征<sup>シ</sup>禹<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>會<sup>シ</sup>群<sup>ヲ</sup>右<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>民<sup>ヲ</sup>進<sup>シ</sup>命<sup>ヲ</sup>益<sup>曰</sup>惟<sup>ニ</sup>徳<sup>ニ</sup>動<sup>ス</sup>天<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup>遠<sup>シ</sup>弗<sup>レ</sup>届<sup>ス</sup>禹<sup>ノ</sup>班<sup>シ</sup>師<sup>ヲ</sup>振<sup>テ</sup>旅<sup>ヲ</sup>帝<sup>乃</sup>証<sup>ス</sup>敷<sup>ク</sup>文<sup>ヲ</sup>徳<sup>ヲ</sup>舞<sup>ヲ</sup>于<sup>テ</sup>羽<sup>ヲ</sup>于<sup>テ</sup>兩<sup>階</sup>七<sup>旬</sup>有<sup>リ</sup>苗<sup>ノ</sup>格<sup>ヲ</sup>祭<sup>ス</sup>氏<sup>傳</sup>云<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>苗<sup>ノ</sup>國<sup>名</sup>在<sup>リ</sup>江<sup>南</sup>荆<sup>一</sup>揚<sup>之</sup>間<sup>特</sup>險<sup>ヲ</sup>為<sup>シ</sup>亂<sup>者</sup>也

三戒<sup>ノ</sup>少<sup>キ</sup>之<sup>時</sup>血<sup>氣</sup>未<sup>レ</sup>定<sup>戒</sup>之

あいへるうも。月れまへあふ  
人の愁とやぢ。恵とがこい。  
るどくくせえ。そ化せ  
とくあうせん。ととくあう  
也。禹のゆきそく三苗と伝せ  
も。くそくくへて。地とく  
よへ志うきりれ  
けうれ時ハ血氣肉ハあまる。

在<sup>リ</sup>色<sup>ニ</sup>及<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>壯<sup>也</sup>血<sup>氣</sup>方<sup>剛</sup>剛<sup>刑</sup>之<sup>在</sup>剛<sup>及</sup>其<sup>ノ</sup>老<sup>也</sup>血<sup>氣</sup>既<sup>衰</sup>戒<sup>之</sup>在<sup>レ</sup>得

情欲 七情六欲

かそく<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>ら</sup> 韻府張

九齡<sup>ノ</sup>議論<sup>如</sup>下<sup>坂</sup>走<sup>丸</sup>

爰<sup>廉</sup>と<sup>こ</sup>の<sup>え</sup>く 戦國<sup>ノ</sup>の<sup>法</sup>一  
公子<sup>ノ</sup>の<sup>門</sup>客<sup>と</sup>わ<sup>つ</sup>め<sup>て</sup>珠<sup>一</sup>  
履<sup>と</sup>そ<sup>き</sup>飛<sup>鴻</sup>と<sup>替</sup>み<sup>一</sup>唐  
れ<sup>女</sup>年<sup>ノ</sup>の<sup>銀</sup>鞍<sup>自</sup>千<sup>金</sup>蟻<sup>一</sup>  
眉<sup>と</sup>買<sup>ハ</sup>れ<sup>類</sup>也

苔<sup>ノ</sup>の<sup>た</sup>も<sup>も</sup> 遍<sup>照</sup>の<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>  
ま<sup>あ</sup>人<sup>ハ</sup>い<sup>そ</sup>か<sup>の</sup>衣<sup>は</sup>ば<sup>ら</sup>ぬ<sup>也</sup>  
共<sup>れ</sup>た<sup>も</sup>も<sup>よ</sup>か<sup>ら</sup>ん<sup>こ</sup>お<sup>せ</sup>よ  
百<sup>年</sup>の<sup>分</sup> 白<sup>氏</sup>文<sup>集</sup>第<sup>四</sup>新<sup>一</sup>  
樂<sup>時</sup>市<sup>原</sup>銀<sup>瓶</sup>云<sup>為</sup>君<sup>一</sup>

か物ようこきうく情欲あり。  
身とあわあてくさけやま  
み珠とく<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>ら</sup>に似  
る。爰廉とこのそく實とつ  
いや。是とすく昔れたも  
とおやつき。いさめうかろりふ  
しく物とあ。そひ。心は能う  
や。このむはくみさしあす。







まろいひに似せし一尊相公と  
 云は是あり淨藏貴師の父  
 也其文章にも多くは朝文  
 粹一のきり異道の達者  
 也寛平延喜の比れ人あり  
 寺野大師 弘法大師の大師  
 附法傳并元亨教書第一  
 律也

かろりとつひ洗あせとまじ  
 の大師れぬ能の月福よい  
 了。大師ハ兼和れくめおかく  
 せ給へり。お町うけりあつこと。共  
 後れともや。能おかつらき

お初めにいただ。大尊よつひお世ハお初めおまろ  
 くありといふ。大よつきおまろつらつらつら。後には  
 也。人事おやう中よ。道城のむらり氣味ぬ

うさひあ。是実の大事也。一は道をやて。こ  
 後よろろさうん人いつ世れまきうすされん  
 あおととついとままん。さうろあう人とりな  
 を。かろきさだのかりとらんや

ちののしせ 孟子離婁上是  
 猶酒醉而強酒  
 うりりき人もさうちうよれ  
 人もありて 前漢書蓋饒寛  
 賀許伯入第曰無多酌我我  
 則酒狂丞相魏侯笑曰公  
 醒而狂何必酒也  
 又酒のし、 狂茶と云也

世おんえぬとのおわき也。  
 ともあつともよ。まろ酒とす  
 めて。志サのせつらと身と  
 すらる。いうまろゆへともゆえ



あらくしき... 宿酒

のまめ... 莊子<sup>ニ</sup>狂醒

三日不<sup>レ</sup>已 晋書<sup>劉伶</sup>曰天

生<sup>劉伶</sup>以酒為名<sup>一</sup>飲<sup>下</sup>石

五<sup>半</sup>解醒<sup>詩</sup>文醒<sup>病</sup>酒也

生をへて... 死<sup>う</sup>ろ<sup>う</sup>ら<sup>ね</sup>

わくきめ 辛<sup>レ</sup>勞<sup>ろ</sup>る<sup>め</sup>也

むとの國 吳<sup>一</sup>國也

あま<sup>り</sup> あ<sup>ろ</sup>る<sup>り</sup>

むも<sup>ろ</sup>し 茅<sup>ヒモ</sup>のひとをむ

ろ<sup>せ</sup>の<sup>も</sup>也

あ<sup>ろ</sup>る<sup>り</sup>す<sup>す</sup> <sup>そ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>

羞<sup>明</sup>

我<sup>カ</sup>い<sup>り</sup>き<sup>キ</sup> <sup>コ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>り</sup>

金... 三...

す。のむ人此<sup>カ</sup>い<sup>と</sup>へ<sup>る</sup>ま

又<sup>モ</sup>眉<sup>も</sup>をむ<sup>そ</sup>あ<sup>人</sup>め<sup>を</sup>う<sup>り</sup>て

と<sup>て</sup>ん<sup>と</sup> <sup>よ</sup>き<sup>ん</sup>と<sup>す</sup>あ<sup>ま</sup>

と<sup>て</sup>へ<sup>て</sup> <sup>む</sup>き<sup>と</sup>め<sup>て</sup>と<sup>く</sup>あ<sup>ま</sup>

の<sup>ま</sup>せ<sup>つ</sup> <sup>む</sup>ら<sup>り</sup> <sup>き</sup>人<sup>も</sup>

は<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup> <sup>お</sup>狂<sup>人</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>を

こ<sup>う</sup>ま<sup>り</sup> <sup>く</sup>息<sup>災</sup>あ<sup>つ</sup>人<sup>も</sup>

同<sup>れ</sup> <sup>ま</sup>へ<sup>は</sup> <sup>大</sup>り<sup>れ</sup> <sup>病</sup>志<sup>と</sup>

あ<sup>ろ</sup>る<sup>り</sup> 万<sup>葉</sup>。

か<sup>う</sup> <sup>と</sup>い<sup>ふ</sup> <sup>の</sup> <sup>り</sup> <sup>も</sup> <sup>酒</sup> <sup>の</sup> <sup>そ</sup>

え<sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>き</sup> <sup>す</sup> <sup>と</sup> <sup>ま</sup> <sup>う</sup> <sup>て</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>り</sup>

た<sup>ふ</sup> <sup>わ</sup> <sup>け</sup> <sup>か</sup> <sup>く</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>酒</sup> <sup>れ</sup> <sup>そ</sup>

え<sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>き</sup> <sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>り</sup> <sup>也</sup>

酒<sup>氏</sup> <sup>こ</sup> <sup>う</sup> <sup>か</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>き</sup> <sup>こ</sup>

う<sup>の</sup> <sup>り</sup> <sup>あ</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>い</sup> <sup>て</sup> <sup>罵</sup>

白<sup>樂</sup> <sup>天</sup> <sup>答</sup> <sup>勸</sup> <sup>酒</sup> <sup>詩</sup> <sup>云</sup> <sup>莫</sup> <sup>怪</sup> <sup>近</sup>

來<sup>都</sup> <sup>不</sup> <sup>飲</sup> <sup>終</sup> <sup>廻</sup> <sup>因</sup> <sup>醉</sup> <sup>却</sup> <sup>沾</sup> <sup>巾</sup>

誰<sup>料</sup> <sup>平</sup> <sup>生</sup> <sup>狂</sup> <sup>酒</sup> <sup>客</sup> <sup>如</sup> <sup>今</sup> <sup>寔</sup> <sup>作</sup>

酒<sup>悲</sup> <sup>人</sup>

つ<sup>い</sup> <sup>む</sup> <sup>ら</sup> <sup>洗</sup> <sup>地</sup> <sup>ま</sup> <sup>り</sup>

ふ<sup>も</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>事</sup> <sup>実</sup> <sup>あ</sup> <sup>て</sup> <sup>き</sup> <sup>嘔</sup>

吐<sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>の</sup> <sup>類</sup> <sup>也</sup>

百<sup>葉</sup> <sup>の</sup> <sup>書</sup> <sup>食</sup> <sup>貨</sup> <sup>志</sup> <sup>夫</sup>

ある<sup>り</sup> <sup>前</sup> <sup>後</sup> <sup>も</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>り</sup> <sup>す</sup> <sup>た</sup> <sup>れ</sup>

ゆ<sup>ま</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>へ</sup> <sup>き</sup> <sup>日</sup> <sup>み</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>ま</sup> <sup>沙</sup>

あ<sup>ら</sup> <sup>り</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>へ</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>り</sup> <sup>日</sup> <sup>ま</sup> <sup>て</sup>

顔<sup>い</sup> <sup>く</sup> <sup>地</sup> <sup>く</sup> <sup>す</sup> <sup>お</sup> <sup>い</sup> <sup>ひ</sup> <sup>す</sup>

生<sup>を</sup> <sup>へ</sup> <sup>て</sup> <sup>う</sup> <sup>や</sup> <sup>う</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup>

あ<sup>ら</sup> <sup>れ</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>え</sup> <sup>す</sup> <sup>お</sup> <sup>か</sup> <sup>や</sup> <sup>き</sup> <sup>こ</sup>

た<sup>く</sup> <sup>の</sup> <sup>大</sup> <sup>き</sup> <sup>を</sup> <sup>か</sup> <sup>き</sup> <sup>て</sup> <sup>う</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup>

ひ<sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup> <sup>人</sup> <sup>を</sup> <sup>う</sup> <sup>ら</sup> <sup>か</sup> <sup>ら</sup> <sup>め</sup> <sup>を</sup>



益食才ニ一斛西 百藥之長也

見すうしと。盡想もあく。礼儀

憂<sub>ウ</sub>すうとく<sub>ト</sub>とく<sub>ト</sub> 東方朔傳

おもそむくり。かくかく礼めふ

銷憂者莫若酒 古樂府何

あひさらん人。ねさくは行く

以<sub>カ</sub>憂<sub>ウ</sub>唯<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>杜康 杜康善

あひさらんや。人の國はかく

造酒故<sub>ニ</sub>為<sub>リ</sub>酒<sub>ノ</sub>名<sub>ト</sub>

あひさらんや。人の國はかく

丁<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>う<sub>ニ</sub>こ<sub>ト</sub>も 詩云憂

あひさらんや。人の國はかく

心如醉<sub>カ</sub>又云憂<sub>ウ</sub>如<sub>シ</sub>醉<sub>カ</sub>

あひさらんや。人の國はかく

後の世々 上はいせよハとい

あひさらんや。人の國はかく

い<sub>ハ</sub>な<sub>ハ</sub>後の<sub>ノ</sub>を<sub>ハ</sub>い<sub>ハ</sub>今<sub>ハ</sub>生<sub>ハ</sub>は

あひさらんや。人の國はかく

生酒とのめんあきと也

あひさらんや。人の國はかく

往生礼讚云恒<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>瞋<sub>ニ</sub>毒<sub>ノ</sub>害<sub>ト</sub>

あひさらんや。人の國はかく

火<sub>ニ</sub>焚<sub>ニ</sub>燒<sub>ニ</sub>智<sub>ノ</sub>惠<sub>ノ</sub>慈<sub>ノ</sub>善<sub>ノ</sub>根<sub>ト</sub>

あひさらんや。人の國はかく

一人の上よてんころたよかりし。あひさらんは

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく

あひさらんや。人の國はかく







酒をとりて人よきもせたり人  
 梵網經心地法門品云是酒  
 起罪因縁而菩薩應生一切  
 衆生明達慈而更生一切衆  
 生顛倒之心者是菩薩波羅  
 夷罪又云若佛子故飲酒而  
 生酒過失無量若自身手過  
 酒器與人飲酒者五百世無  
 手何況自飲亦不得教一切  
 人飲及一切衆生飲酒况自  
 飲酒若故自飲教人飲者犯  
 輕垢罪 孟子離婁下禹惡  
 旨酒而好善言注戰國策曰  
 儀狄作酒禹飲而甘之曰後  
 世必有以酒亡其國者遂疏

ふしうとをもあひ出てあ  
 る。ほのせ八人の智恵と  
 しあひ善根をやくこと大  
 のもくして。悪とまりよ  
 ろりの戒を破つて地獄ふ  
 随へ。酒をみて人よのま  
 せう人。又百生うる。よま  
 りものよ生家とくう。仏ハ

儀狄而絶旨酒

かこくましとらふおれ  
 こ終るるとりて別は  
 せよまかあり今台せ  
 て一版なり

月の夜をたあしむのこ  
 陳鴻長恨歌傳驪山雪夜上  
 陽花朝 李白月下獨酌詩  
 花向一壺酒獨酌無相親  
 孟憲明月對影成三人  
 又揚誠齋月下傳孟詩鶴林  
 三露子カカスリ 謝惠連  
 雪賦梁王遊苑克園乃置音  
 酒命賓文天寶遺事王元寶  
 母天 此徑通客飲莫

後始ふまき。かこくましと  
 あふおれと。そのつら  
 りこたありもあるへ。月の  
 夜をたあした善のこもふ  
 てもか。のうふおれして  
 出う。のろりの真とそふ  
 ぶ。のうせつ。あつ。あひ  
 のおよなれへき。とらひ

朱道



詠之<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>飲<sup>ス</sup> 李白宴桃李園序 風瓊筵而翠花飛羽觥而華月白樂天詩花下忘歸  
白居易詩 芳樽是春風  
みきまろく 沙酒 林酒 祭  
時如<sup>レ</sup>い書也

次<sup>ニ</sup>て<sup>レ</sup>とのつを 宋壺山夜雪詩 一炉柴火三盃酒誰記  
山陰有<sup>レ</sup>戴逵  
心<sup>ニ</sup>くあ<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>か 催<sup>ス</sup>樂工  
我家<sup>ハ</sup>戸<sup>ニ</sup>て<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>株<sup>ヲ</sup>も<sup>レ</sup>た<sup>ク</sup>  
これ<sup>ハ</sup>大<sup>ニ</sup>老<sup>キ</sup>ま<sup>セ</sup>む<sup>レ</sup>こ<sup>ト</sup>に<sup>セ</sup>ん  
み<sup>サ</sup>く<sup>者</sup>か<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>より<sup>ん</sup>あ<sup>ハ</sup>  
ひ<sup>さ</sup>く<sup>者</sup>さ<sup>う</sup>か<sup>セ</sup>よ<sup>ま</sup>ん  
ち<sup>う</sup>つ<sup>は</sup>り<sup>き</sup>ん<sup>の</sup>  
唐山三叟竹林七賢乃類也

あひらうもむあくさむなれ  
くか<sup>レ</sup>ぬあ<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>のみとれ  
うら<sup>レ</sup>り<sup>れ</sup>く<sup>さ</sup>物<sup>み</sup>き<sup>ま</sup>あ<sup>と</sup>  
よ<sup>レ</sup>や<sup>う</sup>あ<sup>つ</sup>を<sup>も</sup>ひ<sup>し</sup>て<sup>さ</sup>  
一<sup>か</sup>さ<sup>れ</sup>ら<sup>う</sup>び<sup>と</sup>り<sup>あ</sup>せ  
え<sup>レ</sup>あ<sup>ま</sup>て<sup>あ</sup>ま<sup>て</sup>物<sup>り</sup>あ<sup>と</sup>  
し<sup>く</sup>て<sup>あ</sup>れ<sup>ら</sup>さ<sup>む</sup>  
う<sup>ひ</sup>て<sup>あ</sup>り<sup>の</sup>こ<sup>う</sup>い<sup>と</sup>れ

か。旅のうらむ神山あまう

て。成<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>と</sup>ひ<sup>て</sup>あ<sup>ま</sup>て<sup>あ</sup>ま<sup>て</sup>の<sup>と</sup>た  
あ<sup>も</sup>れ<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>む<sup>ら</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
の<sup>み</sup>ら<sup>う</sup>も<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
む<sup>と</sup>つ<sup>ら</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
し<sup>と</sup>つ<sup>ら</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
新<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>

罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>  
罪<sup>ゆ</sup>え<sup>う</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>ら</sup>



と少 貞吉ハ侍吏ハ酔テ  
 丞相の車れ上ハ吐を酔飽の  
 失を以て士とせらへうし付  
 と云うつそハ侍吏事ハあ  
 且醉人となし不辨といふ事  
 あれとも世教ハあつて大  
 飲を戒じへき事也  
 あつて云う あり  
 あり  
 むきあけらる 九降はまを  
 あけらる也  
 むきちろひて きう抱きき  
 おまもあつてむきけりも  
 ゆ也

後てあきかたつあどあけ  
 のむきあきたつにまをひて  
 わせらうかあうかあうき  
 ともいふ事ハ出。抱もきあ  
 へい。むきあきらむむきあうひ  
 てよらう。うらりすう。むき  
 一うよ毛おひるもかかそ  
 らきこのけと。わうくつきく

黒戸 清涼殿の少子ある遊  
 仁天の而

小松御門 光孝天皇魂小松  
 天皇仁明第二皇子也 元慶  
 八年二月即位時歳五十四  
 仁和三年崩年五十七  
 む人よれりましし時  
 未即位の時也

海さかしく 意事也今時の料  
 程にして中食類なる人  
 三九  
 涉義 正月十五日百官各勤を献て  
 ともつらるる延表式云事根源  
 延のね時海さかしくのねた  
 世治事采也

箇中書王 後醍醐院事

くらと

思戸ハ小松御門位よりせ  
 て。首ら人よあうましし時。  
 まさあつるせさき治と云た  
 海らて。常よいとあませ治を  
 あつる也。みる海本よすき  
 後ら。黒戸といふ事  
 後ら。黒戸といふ事

箇中書王 後醍醐院事  
 後醍醐院事



御征夷大將軍の御時  
中善八中善の御時王八  
五也

依之木隠岐入道 東鑑四十

建長二年十二月二十九日

隠岐太郎左衛門入道心願

者佐之木隠岐前司義清嫡

男幕府近背也俄出家遁世

訖云 与若狭前司泰村度

之等座著上下之至而及

摩故今及此云

派の之り 晋書胸侃嘗造船

其木屑并積皆令薪而掌之

其後元會大雪始晴願事前

あふ。あつりて故。まゝに産の  
かん。まゝりきれん。いゝせんや  
は。ありきるふ。依之木隠岐入  
道。のこきりれ。のぞ車。ま  
て。おが。ま。り。こ。り。き。れ。  
一。産。よ。志。う。れ。て。派。主。の。ま。り  
ら。ひ。あ。つ。り。き。り。ど。り。た。め。き。ん  
用。え。あ。り。う。こ。と。人。感。一

猶濕故是以取掌木屑布地  
蕭服之類陸沈詩曰致力中  
原了無事平頭木屑是功名  
吉田中納玄 藤房欽万里小  
略と吉田とも号すなり也

あへりま。り。け。事。と。あ。る。も。の  
れ。こ。り。お。た。る。も。お。吉。田。中  
納。玄。の。う。そ。た。す。お。こ。の。用。え

や。あ。つ。り。き。る。も。の。産。ひ。こ。り。し。う。さ。う。り。か。り。き。  
い。こ。と。あ。ひ。き。る。の。こ。き。り。あ。つ。り。や。一。こ。と  
や。う。れ。事。也。産。れ。役。と。事。の。さ。る。人。の。こ。り。き。れ。お  
こ。と。あ。つ。り。き。る。も。の。故。実。也。と。也

實初 伊孫系れてありり時  
此信の初垂ある事とき

或。雨。の。あ。つ。り。き。る。も。肉。付。り。た。は



少座の海地をそれと云ふ  
 清涼殿あり  
 奏後宣傳の事と司馬也  
 禁秘抄云典侍の職を重為  
 少乳母之人老徳木走女御  
 之云々案清涼二ツあり宰  
 劍と御執事と常々夜御  
 の少座中少座の上は安置  
 是書少座の御海也

公の知りきざらば少座の御海也

御系と見え人よかざるに  
 寶劍と云ふ人ともちるる  
 房はあふ別殿の御筆  
 書少座の御劍よていふあれ  
 と志のひやうふいふに  
 少座の御海也

入宋 支那へいづくか  
 世まれん入唐といひ宋元  
 の時をきま入宋入元とい  
 るり

入宋の沙門道眼上人  
 切経成持ましくて六波羅

道眼上人 道元と云ふ人あれ  
 と別人るる一と道元越前  
 永平寺の開山とて日本曹  
 洞宗の始也教書云道元建  
 長五年八月死給ハ兼好あり  
 前代の人也道眼を兼好  
 同附也道眼の末は兼好  
 那蘭寺より道眼の後  
 少あり 首標嚴浄 十卷あり

のあふりやも世といふ  
 り安曇しくとも首標  
 嚴浄を講しくて那蘭陀  
 寺を号すそ聖の中は

陀大道場浄と云ふ也疏云那蘭陀此云施無厭寺  
 龍名也 西域記云菴波  
 羅國有龍池中有龍名施無厭寺近彼池故以標號  
 江師 大江巨舟御也



大率、神ありぬよ江州と云

江次才江後ると云事も皆

匡房作也事のありよて口

きるるぬよ世ふらうらう

さうものまも初も江州の字

也と云うらうせり 匡衡

本因 成衡 匡房正二在

推中納言孀者

西域傳 女辨三秀天竺へ言と

アケの記録十三卷あり西

域記とぬつ

法顯傳 法顯三秀海天の記

録也 上巻より足るなり

西明寺 唐々法相宗沙門

因測の居る寺也 因測を

窠基の弟子基ハ云計の身

子也白氏文集にも西明寺

牡丹の記あり

那蘭陀寺ハ大門

水むき也と江州の説也

ていひつるえこれと西域傳

法顯傳おもあもあはれに

ふんふらう江州をいうふ

ふんふらう江州をいうふ

せ。おかつらう。唐去の西

明寺を水むき切備あり

中

引きちやうハ。正月ようちう

きちやうと。美云院より祇園

苑へ出でて。焼あくらあり。法

成統の沈よこうと云やとハ。

祇園苑の沈よこうと云あり

事ハ日本國學其例年始打

毬杖然則毬杖王冠春と云

事ハ類聚爆ハ相異經西方深山由

快道

西



あり又元坐<sup>ノ</sup>も正月十日僧徒ありて燈をとり一仏舍利をんり  
何れ爆弁のりあり日本のはりさちやうと僧家よりひけりハ漢明帝の時  
一めて天竺より仏法をうり五嶽の道士をやらんと折よりりてを  
ありをんりとして仏經をたよき道士の書をちよきとて出をかくあまた  
士の虫焼失すれんたの書もせりとてた華をもと云又西域美長や東  
土やとんやれ西域仏法は華風よりて東土へ流布せると云り也ともいつり  
是ハ皆沙門の書とまりとされん我れを考ふるより一けは正月十日  
たつきちやうとあきハ神中抄乃況は同じきとすんき也

真言院 拾芥云在ハ省北僧經人侯勤修佛法調等 神京誌 拾芥云天  
子遊覽可以近衛次將為別當乾臨閣謂之正殿金毘羅石二條南大宮西八町  
三條北土生東善女苗王常見此所上代神別者有公當長保年中道綱補之

二ゆき 附ハ名を塩よに  
とく 香山ハ名を五ノ角ニ比  
一 王勉ハ雪と見續灰よた

あれくこ書だんえけこゆき  
とらふ事よぬつきあつひた

とあつためあれん 珠<sup>ハ</sup>珠<sup>ハ</sup>珠<sup>ハ</sup>  
とくくうとことあん

あふ似えれん 粉雪といふ

いきや本乃もさ 牆垣樹木  
の岐也

たまれこ書といふ入きざあ

積<sup>ハ</sup>積<sup>ハ</sup>積<sup>ハ</sup> 三巻あり

やまらそんものときいふ

やがきや本れあひもいふあへいとあつ物

ありやきむじうあひひあつるものや鳥羽院

れさあくかりあつて雪の障<sup>ハ</sup>がく障<sup>ハ</sup>れきり

り。積<sup>ハ</sup>積<sup>ハ</sup>乃すけう日化<sup>ハ</sup>り書<sup>ハ</sup>り

隆親 四糸隆季 隆房 隆術  
隆親 権六納言正一  
隆親 二位檢別当  
四糸六納言隆親にかけ

隆親 権六納言正一



かゝるり 干鮭と云 和名

云雀鳥錫と云 鮭 折青反 和名佐

介今案俗用鮭字非也 其子 鮭音圭 鮭音魚 一各也

似毒 覆盆也 見唐韻

赤光一名年魚 春生 年中死 故名之 九魚と生み

りかろりくろと云 鮭とも

鮭とも云 申よつてぬき

くろを 鮭とも 鮭とも

法 鮭とも云 塩よつきたる

鮭 鮭魚 鮭魚 鮭魚と云 本草綱目

久 十年十月十三日 頼朝於遠江國蒲原佐木三島盛細相副小刀於鮭楚割

敷折以字息小童送進御宿申云只今削之令食之趣氣味頗懇切早可聞食飲

云 殊御自愛從折敷披御旨筆曰

よりりあくくろりいさくろり

楊氏漢語抄云 銀 看生冬死故名 魚宗廟と云るは 壞換日商祭 鮭魚 和名

といふ物と供御ふ事あり

物よりきつ成かあや一

物まいつやあ〜と人

中きつをすて 大納言鮭と

いふ物まいつねるりあ

鮭乃ち〜り 東鑑第十建

和名云 鮭魚 一名鮭魚 和名

和名云 鮭魚 一名鮭魚 和名

和名云 鮭魚 一名鮭魚 和名

和名云 鮭魚 一名鮭魚 和名

和名云 鮭魚 一名鮭魚 和名

や曲礼に之えり 稍魚鱈以為夏補助生草也と云るは古乃訓也と國語

又えり 鮭も鮭と云るは 鮭魚ハさけ也 鮭魚ハあや也 今和名集云と云るは

鮭と鮭とせよ久〜〜かき 傳子ゆへよと云る〜〜引用也

ふ〜あれさげのさ〜り 何条なりかあ〜

鮭のさ〜り 八ま〜〜と云るは

八は〜〜と云るは

八は〜〜と云るは

八は〜〜と云るは

八は〜〜と云るは

是等よりあり 律の禁也 曲 礼 獻鳥者佛其首 畜鳥則勿 佛也 注佛謂狹轉其首 恐其 喙之害人也 畜者不然 須其 性也 又曰 效馬效羊者 右畜 之效天者 左畜之 注效 陳獻 也 以右手 奉之 為便 天以左 手防其 齧噬 事文類聚云

夫追...











まきみ

圖を國をう

みよのうとこふのう

ま。是ハいさめつ馬ありとて。鞍くらをなましくさき  
きり。又あとのく。ききみおけあてぬはま  
そハまふくつてあわおちらあつへーとて。のーさ  
こきり。海うみをさくんと人かえりり世よをさく



白砂軒



